

鳥をとるやなぎ

宮沢賢治

青空文庫

「煙山けむやまにエレツキのやなぎの木があるよ。」

藤原慶次郎けいじろうがだしぬけに私に云いいました。私たちがみんな教

室に入いって、机すわに座り、先生はまだ教員室に寄よっている間でした。

尋常じんじょう四年の二学期のはじめ頃ころだっと思ったと思います。

「エレキの楊やなぎの木？」と私が尋ね返たずそうとしましたとき、慶次郎

はあんまり短みくて書けなくなつた鉛筆えんぴつを、一番前の源吉に投げつけました。源吉はうしろを向むいて、みんなの顔をくらべていました。すばやく机に顔を伏ふせて、両手で頭をかかえてかくれていた慶次郎を見つけると、まるで怒おこり出して

「何するんだい。慶次郎。何するんだい。」なんて高く叫さけびまし

た。みんなもこつちを見たので私も大へんきまりが悪かったのです。その時先生が、鞭むちや白墨はくぼくや地図を持って入つて来られたものですから、みんなは俄にわかにしずかになつて立ち、源吉ももう一つつべん遍こつちをふりむいてから、席のそばに立ちました。慶次郎も顔をまつ赤にしてくつくつ笑いながら立ちました。そして礼が早んで授業がはじまりました。私は授業中もそのやなぎのことを早く慶次郎に尋ねたかったですけれどもどう云うわけかあんまり聞きたかつたために云い出し兼ねていました。それに慶次郎がもう忘れたような顔をしていたのです。

けれどもその時間が終り、礼も済んでみんな並ならんで廊下ろうかへ出る途とちゆう中、私は慶次郎にたずねました。

「さっきの楊の木ね、煙山の楊の木ね、どうしたって云うの。」
慶次郎はいつものように、白い歯を出して笑いながら答えました。

「今朝ごんべえ権兵衛茶屋のところで、馬をひいた人がそう云っていたよ。
煙山の野原に鳥を吸い込む楊の木があるって。エレキらしいって
云ったよ。」

「行こうじゃないか。見に行こうじゃないか。どんなだろう。き
つと古い木だね。」私は冬によくやる木片もくへんを焼いて髪毛かみのけに擦こす
るとごみを吸い取ることを考えながら云いました。

「行こう。今日僕ぼくうちへ一遍帰つてから、さそいに行くから。」
「待ってるから。」私たちは約束やくそくしました。そしてその通りそ

の日のひるすぎ、私たちはいつしよに出かけたのでした。

権兵衛茶屋のわきから蕎麦そばばたけや松まつばやし林を通つて、煙山の

野原に出ましたら、向うには毒ヶ森や南なんしやうざん晶山が、たいへん暗

くそびえ、その上を雲がきらきら光つて、処ところどころ々には竜の形りゆうの

黒雲もあつて、どんどん北の方へ飛び、野原はひっそりとして人も馬も居ず、草には穂ほが一杯いっぱいに出ていました。

「どっちへ行こう。」

「さきに川原へ行つて見ようよ。あそこには古い木がたくさんあるから。」

私たちはだんだん河の方へ行きました。

けむりのような草の穂をふんで、一生けん命急いだのです。

向うに毒ヶ森から出て来る小さな川の白い石原が見えて来ました。その川は、ふだんは水も大へんに少くて、大抵たいていの処ところなら着物を脱ぬがなくても渉わたれる位だったのですが、一ぺん水が出ると、まるで川幅かわはばが二十間位にもなつて恐ろしく濁にごり、ごうごう流れるのでした。ですから川原は割合に広く、まっ白な砂利じやりでできていて、処々にはひめははこぐさやすぎなやねむなどが生えていたのでしたが、少し上流の方には、川に添そつて大きな楊の木が、何本も何本もならんで立っていたのです。私たちはその上流の方の青い楊の木立を見ました。

「どの木だろうね。」

「さあ、どの木だか知らないよ。まあ行って見ようや。鳥が吸い

込まれるって云うんだから、見たらわかるだろう。」

私たちはそっちへ歩いて行きました。

そこらの草は、みじかかったのですが粗あらくて剛こわくて度々たびたび足を切りそうでしたので、私たちは河原に下りて石をわたって行きました。

それから川がまがっているので水に入りました。空が曇くもっていましたが水は灰いろに見えそれに大へんつめたかったのです、私たちはあまのじやくのような何とも云えない寂さびしい心持がしました。

だんだん溯のぼって、とうとうさつき青いくしやくしやの球たまのように見えたいちばんはずれの楊の木の前まで来ましたがやっぱり野

原はひっそりして音もなかったのです。

「この木だろうか。さつぱり鳥が居ないからわからないねえ。」
私が云いましたら慶次郎も心配そうに向うの方からずうつとならんでいる木を一本ずつ見ていました。

野原には風がなかったのですが空には吹ふいていたと見えてぎらぎら光る灰いろの雲が、所々鼠ねずみいろの縞しまになつてどんどん北の方へ流れていました。

「鳥が来なくちやわからないねえ。」慶次郎が又云いました。

「うん、鷹たかか何か来るといいねえ。木の上を飛んでいて、きつとよろよろしてしまふと僕はおもうよ。」

「きまつてらあ、殺せつしやうせき生石せきだつてそうだそうだよ。」

「きつと鳥はくちばしを引かれるんだね。」

「そうさ。くちばしならきつと磁石にかかるよ。」

「楊の木に磁石があるのだろうか。」

「磁石だ。」

風がどうつとやって来ました。するといままで青かった楊の木が、俄にわかにきつと灰いろになり、その葉はみんなブリキでできているように変ってしまいました。そしてちらちらちらちらゆれたのです。

私たちは思わず「いっしょ緒に叫んだのでした。」

「ああ磁石だ。やっぱり磁石だ。」

ところがどうしたわけか、鳥は一向来ませんでした。

慶次郎は、いかにもその鷹やなにかが楊の木に嘴くちばしを引っぱられて、逆さかさになつて木の中に吸い込まれるのを見たいらしく、上の方ばかり向いて歩きましたし、私もやはりその通りでしたから、二人はたびたび石につまづいて、倒れたおそうになつたり又いきなりバチヤンと川原の中のたまり水にふみ込んだりもしました。

「どうして今日は斯こう鳥がいなだらう。」

慶次郎は、少し恨めうらしいように空を見まわしました。

「みんなその楊の木に吸われてしまったのだらうか。」私はまさかそうでもないとは思ひながら斯う言いました。

「だつて野原中の鳥が、みんな吸いこまれるつてそんなことはないだらう。」慶次郎がまじめに云いましたので私は笑いました。

その時、こつち岸の河原は尽きてしまつて、もつと川を溯るには、どうしてもまた水を涉らなければならぬようになりました。そして水に足を入れたとき、私たちは思わずあつと棒立ちになつてしまいました。向うの楊の木から、まるでまるで百足びきばかりの百舌もずが、一ぺんに飛び立つて、一かたまりになつて北の方へかけて行くのです。その塊かたまりは波のようにゆれて、ぎらぎらする雲の下を行きましたが、俄かに向うの五本目の大きな楊の上まで行くくと、本当に磁石に吸い込まれたように、一ぺんにその中に落ち込みました。みんなその梢こずえの中に入つてしばらくがあがあがあがあ鳴いていましたが、まもなくしいんとなつてしまいました。

私は實際変な気がしてしまいました。なぜならもすがかたまつ

て飛んで行って、木におりることは、決してめずらしいことではなかつたのですが、今日のはあんまり俄かに落ちたし事によると、あの馬を引いた人のはなしの通り木に吸い込まれたのかも知れないといふのですから、まったくなんだか本当のような偽うそのような変な気がして仕方なかつたのです。

慶次郎もそうなようでした。水の中に立つたまま、しばらく考えていましたが、気がついたように云いました。

「今のは吸い込まれたのだろうか。」

「そうかも知れないよ。」どうだかと思ひながら私は生返事なまへんじをしました。

「吸い込まれたのだねえ、だってあんまり急に落ちた。」慶次郎

も無理にそうきめたいと云う風でした。

「もう死んだのかも知れないよ。」私は又どうもそうでもないと思ひながら云いました。

「死んだのだねえ、死ぬ前苦しがつて泣いた。」慶次郎が又斯うは云いましたが、やつぱり変な顔をしていました。

「石を投げて見ようか。石を投げても遁げなかつたら死んだんだ。」

「投げよう。」慶次郎はもう水の中から円い平たい石を一つ拾つていました。そして力一ぱいさっきの楊の木に投げつけました。

石はその半分も行きませんでした。百舌はにわかにながれと鳴つて、まるで音譜おんぷをばらまきにしたように飛びあがりました。

そしてすぐとなりの少し低い楊の木の中にはいりました。すっかりさつきの通りだったのです。

「生きていたねえ、だまってみんな僕たちのこと見てたんだよ。」
慶次郎はがっかりしたようでした。

「そうだよ。石が届かないうちに、みんな飛んだもねえ。」私も答えながらたいへん寂しい気がして向うの河原に向って又水を涉りはじめました。

私たちは河原にのぼって、砥石といしになるような柔らかな白やわい円い石を見ました。ほんとうはそれはあんまり柔らかで砥石にはならなかったかも知れませんが、とにかく私たちはそう云う石をよく砥石と云って外ほかの硬かたい大きな石に水で擦こすって四角にしたものです。

慶次郎はそれを両手で起して、川へバチャンと投げました。石はすぐ沈しずんで水の底へ行き、ことにまつ白に少し青白く見えました。私はそれが又何とも云えず悲しいように思つたのです。

その時でした。俄かにそらがやかましくなり、見上げましたら一むれの百舌が私たちの頭の上を過ぎていました。百舌はたしかに私たちを恐れたらしく、一段高く飛びあがつて、それから楊を二本越えて、向うの三本目の楊を通るとき、又何かに引っぱられたように、いきなりその中に入ってしまった。

けれどももう、私も慶次郎も、その木の中でもずが死ぬとは思いませんでした。慶次郎は本気に石を投げたのですが、百舌は一ぺんにとびあがりました。向うの低い楊の木からも、やかまし

く鳴いてきつきの鳥がとび立ちました。私はほんとうにさびしくなつてもう帰ろうと思ひました。

「どこかに、けれど、ほんとうの木はあるよ。」

慶次郎は云いました。私もどこかには思ひましたが、この川には決してないと思つたのです。

「外ほかへ行つて見よう。野原のうち、どこか外とこの処とこだよ。外へ行つて見よう。」私は云いました。慶次郎もだまつてあるき出し、私たちは河原から岸の草はらの方へ出ました。

それから毒ヶ森ふもとの麓ふもとの黒い松まつばやし林の方へ向いて、きつねのしつぽのような茶いろの草の穂をふんで歩いて行きました。

そしたら慶次郎が、ちよつとうしろを振り向いて叫びました。

「あ、ごらん、あんなに居たよ。」

私もふり向きしました。もすが、まるで千疋ばかりも飛びたつて、野原をずうつと向うへかけて行くように見えました。今度も又、俄かに一本の楊の木に落ちてしまいました。けれども私たちはもう何も云いませんでした。鳥を吸い込む楊の木があるとも思えず、又鳥の落ち込みようがあんまりひどいので、そんなことが全くないとも思えず、ほんとうに気持ちが悪くなったのでした。

「もうだめだよ。帰ろう。」私は云いました。そして慶次郎もだまってくるつと戻つたのでした。もと

けれどもいまでもまだ私には、楊の木に鳥を吸い込む力があると思えて仕方ないのです。

青空文庫情報

底本：「新編 風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1979（昭和54）年7月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年2月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳥をとるやなぎ

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>